

新春企画

「お水取り」と「若水」



「お水取り」とは、琉球王国時代に行われた行事です。具体的には、旧暦12月20日に首里城から約100キロ離れた沖縄本島北部の辺戸へ使者を派遣して、辺戸ノ口の取った水を取り寄せ、それを元旦に首里城周辺の吉方にあたる2箇所の泉の水を添えて、国王へ献上する行為を指します。首里城周辺で「お水取り」の対象となった泉は、全部で9箇所あり、現在の那覇市内には5箇所ありました(首里2箇所、真和志間切3箇所)。

国王は、これらの水を祖霊や神仏に供えて、みずからも「お水撫で」(*ウビナデイ)をしたと言われています。「お水撫で」とは、お水を盛った器に中指を浸し、額を3回撫でる呪法で、心身を清める意味合いがありました。

これとよく似た民間の行事として「若水」があります。「若水」は、村の古井戸や産井等から、元旦に初めて汲んだ水を指します。この水を、各家の火の神(ヒヌカン)や神棚、床の間に供え、仏壇にはお茶湯にして差し上げ、また家族に「お水撫で」(ミジナデイ)をしました。現在でも、小学生の頃「若水」を持って、各家を回ったという方もいますので、「若水」については、記憶にある方も多いのではないのでしょうか。

今回は、「お水取り」と「若水」に関連する那覇市首里の井戸(カー)や樋川(ヒージャー)を中心に紹介します。

*王家では「ウビナデイ」と呼ばれていたそうです。

お問い合わせ

文化財課 ☎917-3501

首里赤平町の井戸

首里赤平町にある個人所有の井戸です。聞き取りでは、井戸は戦前からあり、終戦直後は赤平の住民が水を汲みに来ていたそうです。10年程前までは、近くの銭湯に水を供給していました。

「若水」はできるだけ樋川の水を汲むようにしていましたが、樋川の遠い場合は、自宅にある井戸の水を汲みました。

この井戸の形は、掘り抜き井戸(ワンドゥーガー)といい、市内でも首里に見られるもので、おそらく戦前の首里に住む人々は、このような井戸から「若水」を汲んでいたと思われます。

※個人所有のため非公開



識名園で行われている真地幼稚園の「ミジナデイ」の様子



弁嶽之川

『琉球国由来記』にある弁嶽之川とは、こちらの井戸を指していると考えられます。崎山樋川と同じく「お水取り」の際に、方角が巳(東)にあたる年は、辺戸の水と一緒に国王へ献上されました。左奥に見える石門は、弁ヶ嶽の大嶽を拝むための石門になります。弁ヶ嶽は、峰全体が崇拝の対象とされており、国王自ら御拝をする格式高い御嶽です。弁嶽之川も峰の一部として崇拝されたため、「お水取り」対象の井戸となったのではないかと考えられます。



寒水川樋川(スンガーヒージャー)

首里寒川町にある「若水」を汲む対象となった樋川です。大正時代の初期には、首里に住む11歳12歳くらいの男の子が、近くの樋川から「若水」を汲んできて、各戸に差し上げました。各戸では、たいてい主婦がこの「若水」を受け取り、男の子たちに一銭か二銭を与えたそうです。「若水」は、御茶湯にして仏前に供えられました。



崎山樋川(サキヤマヒージャー)

「お水取り」の際に使用された樋川です。1713年に成立した『琉球国由来記』では、良い方角(吉方、恵方)が巳(南南東)にあたる年は、辺戸の水と一緒に国王へ献上しました。近くには国家的祭祀施設である崎山御嶽があり、樋川は神聖な場所にあったことがうかがい知れます。

※崎山樋川は平成27年1月から3月にかけて、修復工事を行う予定です。

